
オレとゆー君と召喚獣

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとゆー君と召喚獣

【Nコード】

N6549Y

【作者名】

那家乃ふゆい

【あらすじ】

新学期が開始して二日目。文月学園に一人の転校生がやってきた。『オレ』という一人称ながらも大人しい雰囲気を持った彼は、あろうことか学年最底辺のFクラスへと転入することに。しかし、彼はそこで懐かしい旧友との再会を果たすのだった。「お前……雪冬か?」「もしかして……ゆー君?」打倒Aクラスを胸に掲げ、彼らは今日も学園中を駆け抜けていく。

第一問（前書き）

こんにちは。知っている人は久しぶりです。

ふゆいと申します。

今回は新たにバカテスの二次創作です。

まだまだ至らないところもありますが、誠心誠意頑張ろうと思いますので、応援よろしくお願いします。

それでは、お楽しみください。

第一問

「すごいなあ……桜ってこんなに綺麗だったっけ」

長々と続く桜並木を、通学鞆を肩にかけて歩きながら、少年は一人呟く。

（中学校のときも桜は見たけど……ここまで見事な咲き方はしてなかったなあ。やっぱり地方によって見栄えが違うのかな？ 桜って不思議）

飽きることなく桜を見続けつつも、黙々と正面玄関へと向かう。

（お母さんに聞いた限りだと、あそこで手続きができるはずなんだけど……この学校広すぎるよ……。どこが正面玄関かわからないんだけど）

もうかれこれ三十分はこの近くをぐるぐるしている。どうやらこの少年、生粋の方向音痴のようだ。

「……どうしたの？」

「え？」

少年が周囲をキョロキョロ見回していると、そんな彼を不思議に思ったのか、一人の少女が彼に話しかけてきた。

日本人形のような美しい黒い髪を、腰のあたりまで伸ばしていて、まさに【大和撫子】って感じの綺麗さ。手足も身体もすらって細くて、それでいて凹凸はしっかりしている。一言で形容するなら【美

人」以外の何物でもない。

(うわあ……綺麗な人だなあ……)

そんな素直な感想を浮かべながらも、彼は話しかけてきた少女の方に向き直る。

「あ、すみません。ちょっと正面玄関を探しているんですけど、迷っちゃって……」

「……迷った？　もしかして、転校生？」

「あー、うん。そうなんですよ。昔はここら辺に住んでいて、五年ぶりに帰ってきたんです。それで、割と近所のこの学校に転入することになって……」

「……そう。五年ぶり……あれ？」

はた、と急に少女が動かしていた足を止めた。少女の不意の行動に、少年はコクンと首を傾げる

疑問符を浮かべる彼を他所に、少女はまじまじと少年の全身を値踏みするかのように見つめ始める。

(うー、なんなのさ……めちゃくちゃ恥ずかしいんだけど……)

人に注目されるのが苦手な彼にとって、同年代の少女、しかも美少女に見つめられるのは、なかなか過酷な試練だった。

「あ、あのぉ……どうしたんですか……？」

「……人違いだったら、ごめん。でも、質問していい？」

「え？　あ、はい。構いませんけど……」

思わずと言った様子で少年は少女に尋ねる。

少女はあちこちに視線を泳がせながら、ボソボソと小さめの声で呟いた。

「……貴方……もしかして、雪冬ゆきふゆ？」

「……………え？」

思わず、固まる。

(なんでこの人がオレの名前を……？ っ、アレ？ この人、よく見るとどっかで会ったことがあるような)

「も、もしかして、霧ちゃん!？」

「……………うん。五年ぶり」

「あははっ、ホントに久しぶりだねっ」

(ま、まさか霧ちゃんだったなんて…… 小学校以来だから全然分かっていなかったよ……。こんなところで旧友と再会できるなんて、世の中は何が起こるか分からないね……)

思いがけずも再開した、懐かしの友人。五年もたっているのにも関わらず、よくもまあ自分だと認識できたものだ。本当、世の中というものは面白い。

「……………最初は全然分からなかった。背も伸びてるし、髪も長くなってる」

「それは霧ちゃんもだよ。昔から綺麗だったけど、今はずうっと美人さんじゃない!」

「……………ありがとう。そういうところは、昔から変わらない」

「あ、あれ？ そうかな？」

（確かに昔から人を褒めるのは好きだったけど……そこまで変化がないかな？）

苦笑いを浮かべ、頬を恥ずかしそうに掻く少年　　雪冬。昔の自分を引き合いに出されたことで、羞恥という名の感情が彼の全身を支配していた。

「……全然、変わってない」

「そ、そう言われると少し情けない気もするけど……。……あ、そういうえば【ゆー君】は？　一緒の学校に通ってるんじゃないの？」

懐かしい親友の名前が頭に浮かんだので、雪冬はそのまま口にする。昔は二人とも（彼的には）仲が良かったから、今も親しくしているのだろうか。

期待を胸に尋ねる。しかし、霧ちゃん　　霧島翔子は少し寂しげな表情になると、苦笑いをした。

「……雄二もここには通っている。でも、今は少し疎遠気味。あんまり話す機会がない」

「あ……そうなんだ……」

「……うん。でも、雪冬が気にすることじゃない。もうすぐで、解決するはず」

「そ、そうだね。いつまでも引きずっても仕方がないしね！」

無理やりに元気を引きずり出し、大声を上げる。こんな暗い気持ちの時には元気が一番だと相場が決まっているのだ。

雪冬の不器用な元気に、翔子は我慢できずに口元を抑え控えめに笑った。

「……ふふっ」

「？ どうしたのさ、霧ちゃん」

「……そういつところも、相変わらず」

「う……き、霧ちゃん。恥ずかしいからやめようそいつのは…

…」

結局雪冬は、目的地である正面玄関に着くまでの間、翔子に弄られ続けたのだった。

「……それじゃ、私はこっちだから」

「うん。またねっ」

三階に上がり、別れ道である渡り廊下へと着いた雪冬達。どうやら翔子はAクラスと呼ばれる教室に属しているらしく、そのまま新校舎の方へと歩いて行ってしまった。

廊下の向こうへと消えていく翔子を見送ってから、ふう、と溜息をつく。

「……さあて、オレは旧校舎だね」

手渡された資料を読みながら、教室へと進んでいく。

彼が所属するところはFクラス。転校生でまだ学力審査が終わってないことから、そこに入ることが決まったようだ。

「えーと、男子が四十人超で女子が二人……なんか危険じゃない？
Fクラスって」

（そんな飢えた状態の男子の中に女子を入れるなんて……まるで「食べてください」と言わんばかりじゃないか。オレならすぐにも逃げ出すと思う。）

そして、この観察処分者っていうのはなんなんだろう？ 資料には学園一の問題児って書いてあるけど……なんでわざわざ特殊な呼称を付けるのかな？ 流行り？）

世間一般とは明らかにかけ離れた状況。今まで聞いたこともない単語に、雪冬はわくわくした気持ちを隠せなかった。今もぎゅっと握りしめた拳がプルプルと震えている。

「……つと、そんなこと言ってる間に着いちゃったね。……っていうか、これは学校としてセーフなの？」

目の前に現れた教室を見て、彼は思わず溜息をつく。

（ドアがボロボロの木製っていうところからヤバそうなのに、室札は割れてるし、窓ガラスにはテープがいっぱい貼られてるし……学舎として成り立っているのかな？）

「まあ、気にしても仕方ないんだけどね」

文句をたらたら並べたところで、環境が改善されるわけでもない。ここは腹をくくって受け入れるべきだろう。幸運なことに、雪冬は

順応性抜群の少年だ。たとえ教室がどんな状況だって、過ごしている自信と実力を兼ね備えている。……実力、というのは少し理解できないが。

「……よしっ」

すーはーと大きく深呼吸。転校生は最初のツカミが肝心だ。失敗してしまったらこれからの学校生活に大きな支障が出るかもしれない。

(ここはノリと勢いで乗り切ろう……！)

パンっ和自己的両頬を平手打ちし、気合を入れる。これも転校生の醍醐味というものだ。自分の協調力が試されるとき。雪冬の心の奥底で今世紀最大の闘志の炎があがった。

「イチ、ニーの……サンツ？」

ガラッ

「おはようございまーす？」

『『『……はい？』』』

突然ドアが開いたことに驚いているのか、教室中の視線が彼を串刺しにする。

(う、うう……緊張するなあ……)

どうやら今はホームルーム中だったようだ。初老の男性教師が、教壇に立って司会を務めている。

教師は雪冬に気が付くと、やんわりとした態度で彼を招き入れる。

「ああ、君は先ほど職員室で報告のあった生徒ですね？ とりあえず、ここにきてもらえますか？ 紹介から始めたいと思います」

「あ、はい！」

畳が敷き詰められた床をとととと教卓まで歩く。なぜか一歩踏み出すごとに畳が抜けそうな感覚になるが、きつと気のせいだろう。あまりにも辛辣な教室状況に冷や汗を浮かべながらも、ようやく教壇に到着し、改めてクラスメイトの方を向く。

そんな雪冬を微笑ましそうに見ながら、先生は彼の軽い紹介を始めた。

「えー、新学期が始まって三日が経ちましたが、今日から皆さんに新しい仲間が増えます。皆さんも突然すぎて驚いていると思いますが、仲良くしてくださいね？」

すつ、と周りから気づかれなくらいの強さで先生が彼の背中を押す。

(わ、もう出番なの！？ ま、まだ緊張が取れてないのに……)

ドキドキする胸を必死に抑えつつも、再び前方を見る。

多少個人差はあれど、同様に笑顔で彼の方を見るクラスメイト達。突然現れた雪冬を、受け入れようとしてくれているようにも感じる。

(あ……この人たち、根本的な部分で優しいんだ……)

気が付くと、あれだけ激しく鳴っていた心臓が、静かになっていた。いつのまにか肩の荷も下りているようだ。

よし。

「え、えーと、時雨雪冬しぐれゆきふゆって言います。お父さんの都合で五年ほどこの町を離れていましたが、今年になつて帰ってきました。こんなタイミングでの転入で、右も左も分からない未熟者ですが、どうかよろしく願います」

ペコリ、勢いよく頭を下げる。そして、二・三秒ほどの静寂が教室を包み込んだ。

(あ、あれ……失敗しちゃったかな……?)

心配になり、そのまま顔を上げられず俯く。

(うう……やっぱりダメだったの……?)

一人絶望感に打ちひしがれる雪冬。やはり草食系には成功できなかったのだろうか……。しかし、そんな彼の不安を打ち消すように、誰かの叫び声我突然雪冬の耳へと届いてきた。

「雪冬……お前、本当に雪冬か!？」

「え……?」

予想外の言葉に彼は思わず顔を上げ、声の主を見つめる。

教室窓際後方から二番目の席。百八十センチほどの背丈に加えて、がっしりとした身体が健康さを物語っている。そして何よりも特徴的なのは赤っぽい色のたてがみヘアだろう。狼のような人だ。

残念ながら、雪冬の記憶にこんなガタイのいい知り合いはいない。しかし、その人を見た瞬間、彼の脳裏にはとある一人の人物が浮

かび上がっていた。

(え……嘘でしょ……まさか……)

「ゆー君、なの……？」

雪冬の言葉に、その少年はゆっくりと頷いたのだった。

第二問（前書き）

こんにちは。ふゆいです。

やっと二話目を更新。出来る限り連続投稿で頑張ります。
それではお楽しみください。

第二問

「いやあ、まさか偶然にもゆう君と同じクラスになるとはね。神様も悪戯が過ぎるよ」

「それはこっちの台詞だ。五年もかけて再開するなんて、どこのライトノベルだつての」

あはは、笑い合う二人。

若干紆余曲折はあったものの、無事に自己紹介を終えた雪冬は、先ほど感動の再会を果たした少年、坂本雄二と雑談に花を咲かせていた。

「ゆう君、なんか格好良くなったよねえ。身体も大きいし。オレはまだ全然身体の発育も進んでないのに……ずるいや」

「いやいや、お前がここまででかくなったら逆にドン引きだつて。

草食系男子は小せえぐらいが丁度いいんだよ。だから、お前はそのままでもいい」

「うー……オレのコンプレックスを褒めないでよお……」

むー、と頬を膨らませる雪冬。雄二がしたら吐き気しか催さないが、彼がすることで一種の癒し効果が教室中に満ち溢れていた。現に、クラスの八割はお茶をずずと啜りながらほんわかつた表情でそちらを見つめている。というか、いつのまに用意されたのだろうか。

「え、えっと……雄二、そろそろその子の説明をお願いしたいんだけど……」

「ん？ ああ、お前らは初対面だったな」

目の前で展開されている幼馴染ムードに引き攀った笑みを浮かべつつも、どこか抜けた感じの少年 吉井明久が雄二に話しかける。

明久の周りにいた者たちも同様にコクコクと頷いていた。恐るべき団結力。正体不明の少年を前にして、今Fクラスの心は一つになった。

「コイツは時雨雪冬。俺の小学校時代の幼馴染で、一番仲が良かったと言つてもいいくらいの親友だ。友達の少なかつた俺になにかと懐いてきてな……」

「ち、違うよ！？ 懐いていたんじゃないって！ オレは単にゆー君と気が合つてただけだよ！ そんな弟分みたいな関係じゃ……」

「……なるほど、そういう子なんだね」

「まあそんな感じだ」

「なんかあらぬ方向で納得されてる！？」

ガーン、という効果音が付きそうな表情で落ち込む雨雪冬。そんな彼に苦笑いしながらも、雄二は明久達の紹介を進めていく。

「こいつは吉井明久。俺の悪友で、文月学園一のバカだ。観察処分者とも言われている」

「ちよ、雄二！ よりによってバカ扱いは酷くない！？ そりゃあちよっと人より勉強は苦手だけどさ……学園一ってほどじゃないと思つよ！？ ねえ皆！」

「……（ふいっ）」「」

「畜生周知の事実か！」

「……うん、なんとなくどんな人か分かつた気がするよ。よろしくね、アキくん」

「……なんかその呼ばれ方は特定の危険人物を思い出すんだけど……ま、いいや。こちらこそよろしく」

お互い笑顔で握手をする二人。なんだか似たものオーラで包まれている気がするのには気のせいではないだろう。今ここに、明久二号が誕生した瞬間だった。

「……バカが増えたな」

「「ん？ なにか言った？」」

「いやなにも」

雄二の失言もどこ吹く風。鈍感、難聴、草食と、ある意味三拍子そろった二人が完成した。

明久に続くように、残りの生徒達も自己紹介を行っていく。

「……土屋康太。趣味はとうちよ……なんでもない。特技はとうさ……特にない」

「うん。趣味は盗聴で特技は盗撮だね。ちょっと変な趣味だけど、どんな写真を取り扱ってるの？」

「……これ」

疑うことを知らない雪冬に、康太は素直に自前の写真を取り出す。そこに写っていたのは一人の女生徒。なぜか近くに立っている男子生徒と瓜二つな、少し強気そうな美少女だ。

それはどうやら体育の時間のようで、少女は文月学園指定の体操服に身を包み、ペアの生徒と柔軟体操をしているところだ。身体を捻ることで通常ではあり得ない露出と濡れが見えている。肢体に浮かぶ汗がなんとも健康的で美しい。

「……自信作」

自慢げに胸を張る康太。どう見積もっても確実に犯罪レベルなのだが、誰も気にしてない様子。大丈夫か文月学園。プライバシー保護の重要性をひしひしと感じる。

「……………す、すごい……………！」

しかし、この少年もまた普通ではなかったようだ。盗撮写真を見て歓喜の表情を浮かべている。ここにまた一人、彼を尊敬する信者が出現した。ムツツリ商会今日も商売繁盛。

結局そのままお買い上げ。どうやらその少女は雪冬のストライクゾーンど真ん中だったようで、彼は大事そうに写真を財布の中に入れた。第二話にして早くもキャラがぶれ始めている主人公。この作品の崩壊も近いかもしれない。

「ワシは木下秀吉。今お主が買った写真の少女の双子の弟じゃ。よろしく頼むの」

「へえっ。だから女の子みたいに可愛いんだね。オレ最初は女だと思ってたよ」

「そうじゃ、ワシは男じゃぞ？ 決して女ではない。ましてや性別

【秀吉】でもない。男なのじゃ……………」

「ど、どうしたの！？ なんか黒いオーラがっ」

「放っておいてやれ、雪冬。秀吉にもいろいろあるんだよ」

「う、うん……………」

男じゃ、男なのじゃ……………とトラウマ全開で座り込んでしまった秀吉に、苦笑いを隠せない雪冬。願わくば常識人が現れてくれることを祈りつつ、次の生徒へ。

「ウチは島田美波。ドイツからの帰国子女なの。趣味は……………アキを

ポツコボコにすることよ」

「待つんだ美波。二日前より趣味に磨きがかかってない!？」

「なるほど。アキさんと島田さんはそういう関係なんだね」

「違う! なんか双方の合意の上で成り立っているような流れだけど僕はこれっぽっちも肯定してないんだ!」

「大丈夫だよアキくん。……世の中には色んな趣味の人がいるんだから」

「誤解だあ

っ?」

哀れ吉井明久。必死に弁明をしようと試みるが純粹すぎる雪冬は既に美波の話を信じてしまっている。今頃雪冬の脳内では明久の欄に【マゾヒスト】と書かれてしまっていることだろう。

「最後は私ですね。姫路瑞希ですっ。よろしくお願いしますね」

「あ、うん。よろしく」

桃色ロングの巨乳少女が礼儀正しくペコリと頭を下げる。釣られて、雪冬も慌ててお辞儀を返した。ようやく常識人が現れようだ。落ち着いた雰囲気少女は綺麗な笑顔で雪冬の方を見ている。

「えーと、私は皆さんみたいな特技はないんですけど……趣味は料理です」

「へえっ、料理かあ……オレ、料理ができないから、そういうの憧れるんだよね。よかつたら、今度教えてくれない?」

「はい、いいですよ?」

「……ちよつと待った?」「」

「へ? どうしたのさ、みんな」

平穩無事な会話を繰り広げていた二人を邪魔するかのように大声を出す雄二達。というか男子勢。なぜかその顔は青ざめているよう

にも見えるが、どうしたのだろうか？

首を傾げる雪冬に、雄二達は最大音量の小声という器用な方法で怒鳴ってくる。

(悪いことは言わん！ 姫路から料理を習うのだけはやめとけ！)

(え？ なんでさ。いい人じゃないか。きっと料理も上手いんでしょ？)

(確かに一般常識で考えれば上手いとは思っけど…… 姫路さんは独特すぎるから危険なんだよ！)

(料理に化学薬品を用いるくらいじゃからの)

(え、えー…… それって、料理って言えるの？)

(……… 化学薬品)

(な？ だから、アイツに習うのだけは、本当にやめておけ。これ以上必殺料理人が増えるのだけはなんと少しでも避けたい)

(う、うん……)

「あ、あのー………どうかしたんですか？」

突然内緒話を始めた男性陣に、瑞希は疑問符を浮かべる。自分の料理を他人に教える機会ができるのを妨害されたせいか、少し不機嫌そうだ。

「い、いや、すまんが姫路。雪冬に料理を教えるのはまた今度ってことでいいか？」

「え？ どうしてですか？」

「姫路さんに習う前に少しでも腕を上げておくんだって！ ほ、ほら、姫路さんは料理が上手でしょ？ だから、足手まといにならないようにするんじゃないかな！？」

「……… 雪冬は他人思い」

「じゃからの？ 少し我慢してくれ」

「む……… 仕方ありませんね………」

「う、ごめんなさい……」

男子勢の決死の説得により、殺人犯増加をなんとか食い止めることに成功。今日もFクラスの平和は守られた。非常にやりきった表情をしているのが印象的だ。

まあなにはともあれ、これで自己紹介も無事終了。他のクラスメイト達も一応名前とかを言ってから、事態は落ち着きを取り戻した。

「……………さて、それじゃ準備をするかな」

「準備？ 今からなにかあるの？」

雄二の言葉をきっかけに、クラスメイト達がばたばたと動き回っていく。卓袱台を廊下側に寄せ、今にもバリケードとして機能しそうな並べ方だ。

突然なにが始まったのか、雪冬は雄二に尋ねる。

雄二は「ああ」となんでもないように頷いた。

「お前はまだ転校してきたばかりで知らなかったな。俺達は今、とあるクラスと戦っているんだよ」

「戦う？ それって、パンフレットに書いてあった【試験召喚戦争】ってやつ？ 確か、この学校で試験的に使われている、【召喚獣】を使役して戦うって言う……………」

「そう、その【試験戦争】さ。各クラスの名誉と威信をかけて、全生徒が全力を以てして凌ぎを削る。まさに学生版の戦争」

「でも、まだ新学期が始まって三日目だよ？ なんでこんな早く戦争を……………」

「別に、大した意義はない。ただ、Aクラスの設備が欲しいだけ。今は、それに辿り着くための道程ってところだ」

そこで一旦言葉を切る。そして、雄二は野生児じみた笑みを浮か

べると、楽しそうな表情で言い放ったのだった。

「学年で二番目の強さを誇る、【Bクラス】との試合戦争を」

第二問（後書き）

雪冬（以下：雪）「ゆつきーちゃんねるうー？」

雄二（以下：雄）「……………」

雪「すめらつぱぎー！ 時雨雪冬です！」

雄「……………いや、なんだこのコーナー」

雪「もう、ノリが悪いなあゆー君は。こちらはアシスタントのゆー君こと坂本雄二です！」

雄「……まあ、よろしく」

雪「さて突如始まりましたこのコーナー！ このコーナーは本作品【オレとゆー君と召喚獣】をより深く楽しんでもらおうと立ち上げられた、いわゆる補足コーナーなのです！」

雄「ずいぶんとぶつちやけたな。ていうか、こんな序盤から補足なんているのか？」

雪「いやまだいらないよ？ でも、次回からは召喚獣関係とかでいるじゃない？ だから、一応顔見せ程度に」

雄「なんとという適当……………作品が普通だから後書きで取り返そ……………」

雪「ゆつきーパンチ？」

雄「あべしっ！」

雪「ふうっ。そんなこと言うゆー君はおねむの時間だよ」

雄「……………（ぐったり）」

雪「さて、次回から本格的に始動する【ゆつきーちゃんねる】ですが、当コーナーでは様々な質問や要望、感想をどしどしお待ちしています！ 送ってくれると作者の執筆速度も跳ね上がるかも！」

雄「……………」

雪「さて、それじゃ次回、お会いしましょう。バイニー？」

第三問（前書き）

こんにちは。ふゆいです。

今日もなんとか無事に更新できました。やっぱり趣味っていいですよね。

さて、今回はついに雪冬の召喚獣が登場。これぞバカテスの醍醐味です。

詳しい情報はあとがきの【ゆっきーちゃんねる】にて報告します。それでは、どごぞぞ〜

第三問

Bクラスとの試験召喚戦争。

それは普通に考えると、無謀以外の何物でもなかった。

「び、Bクラスって……本当にオレ達で勝てるの？ 学年最低ランクなんでしょう？」

「なに、心配はいらない。もう既に策は立ててある。お前も、俺の頭の良さは知っているだろう？」

「それは……そうだけど……」

昔から神童として名を馳せていた雄二。常に隣にいた雪冬がその二つ名を知らないわけがない。

しかし……そのためにいくつかの過ちを犯してしまったのもまた事実。雪冬の脳裏には、悲しそうな表情をした翔子と雄二の姿が浮かんでいた。

そんな彼の思いを感じとったのか、雄二は笑いながらポンと雪冬の頭に手を乗せる。

「大丈夫だ。あの時みたいな失敗は繰り返さない。これ以上、俺の周囲の奴らを傷つけてたまるかってんだ。俺は持てるすべてを以てして仲間を守り抜くさ」

「……うん、そうだね。ゆう君はそういう人だよ」

そう。どれだけ月日が経とうとも、どれだけ時間が過ぎようとも、坂本雄二という人物は他人の痛みがわかる人間だ。神童と崇められていた小学校時代でさえ、多少不器用ではありながらも翔子や雪冬のことを気にかけてくれていた。そういう部分では、誰よりも包容力のある男だと言えよう。

(……………まあ、だからオレが惚れたんだけどね)

自嘲気味に笑う雪冬。一応断っておくが、この小説にボーイズラブ要素はない。基本的にノーマルな小説であって、決して腐女子要素は込められていないのだ！

『坂本代表！ Bクラスの先遣部隊が出動しました！』

「そうか、わかった。……………さて雪冬。そろそろ覚悟と度胸を用意しろよ？」

「え？ それって、どういう……………」

「なあに、そんなに難しいことじゃない。簡単なことさ」

ニヤリと妖しい笑いを浮かべる雄二。何故だかは知らないが、突然雪冬の身体には形容しがたいほどの寒気と悪寒が走った。これぞ主人公補正。自分の身に降りかかる災難には敏感な反応を見せる。しかし、それに気付いたとしても確実に巻き込まれるのも主人公というもの。雄二は笑顔を浮かべたまま、雪冬にこう言い放ったのだった。

「雪冬。お前の文月学園試験召喚戦争の、デビュー戦だ」

「……………はい？」

静かになった教室に、廊下の喧騒が一際大きく響き渡った。

「あ、アキくん！」

「え？　　って、雪冬！？　なんでこんなところに！」

Bクラス前の廊下にて姫路瑞希の指揮の下戦闘を行っている明久達。戦力で劣る彼らは防戦一方だが、操作技術に長ける者たちを集めているため、互角以上の戦いを見せていた。

そんな中に現れたド素人の雪冬に、副部隊長の明久は思わず声を荒げる。

「雪冬はまだ召喚獣使ったことないんでしょ！？　こんな混戦状態の所に来たら、一瞬で戦死しちゃうよ！」

「そ、そう言われても……ゆー君がオレに『お前ならやれるさ。俺の期待に応えてくれよ？』って……」

「畜生あの馬鹿なに考えてるんだ！　奇跡でも起きない限り難しいだろ！？」

普通ならば小学生でもわかる。神童の雄二ならば尚更だ。それなのに、何故素人の雪冬を戦場に赴かせたのだろうか。

（とにかく、早く教室に返さないと　　）

撤退を、そう叫ぼうとした明久だったが、

『Bクラス柴田がFクラスの転校生に勝負を申し込みます！ 試験
召喚？』

「え、ええっ!？」

「くそっ！ もうこんなところでまで敵が！」

突如現れたBクラス生徒に、動揺する雪冬。予想外の事態に、明久は素直に感情を露わにする。

「雄二のバカ野郎！ 何考えてんだ？」

「え、えっと……アキくん、こういう場合はどうすれば……」

「ああもう！ とにかく召喚して！ 話はそれからだ？」

「あ、うん！ さ、試験召喚！」

「僕も一応助太刀を！ 試験召喚？」

呼び声に応じて、二人の足元に幾何学的な模様の魔方陣が現れる。それは瞬時に光を放ち、雪冬達の足元に小さなヒトガタを形成した。そして現れる二人の召喚獣。

「……よしっ」

明久の召喚獣はいつも通りの改造学ランと木刀。どこの不良だとツッコミたくなる容姿の最弱召喚獣だ。

「……今なんか誰かに馬鹿にされたような気がするんだけど……」

気のせいです。

「え、えつと……オレのは、コイツかな……？」

控えめに自分の足元を見る。そこにも明久のと同じような召喚獣がいた。

西洋の甲冑に身を包み、周囲に銀色の光を放っている。それほど輝かしい鎧だ。

……しかし、その甲冑召喚獣がドでかい盾しか持っていないのは、どういう了見だろうか。戦いの術があるのか、果たして。

「え、ちよつ……武器もつてないじゃん！」

「オレに言われても……でも、木刀に比べればマシだと思うけど。金属製だし」

「それを言われるとこっちも言い返せないけどさあ……」

はあ、と二人肩を揃えて溜息をつく。だがそんなことで敵は見逃してくれない。例の如く、三下よろしく雄叫びを上げながら突っ込んでくる。

『チェストオ

ッ？』

「くつ、よいしょおおおおお？」

ガキン？ と金属同士がぶつかり合い、甲高い音上がる。Fクラスレベルなら一瞬で押されそうなものだが……、

「なっ！ なんて俺の召喚獣が圧されてんだよ！？」

「オレが……知るわけないだろ！」

Bクラスを相手にしているにも拘らず、雪冬の召喚獣はじりじりと相手をその巨大な盾で押し返していた。

予想外の事態に驚く明久達。そんな彼らの疑問に答えるように、

「戦死者は補習

？」

「うわあああああああああああああああ？」

そして例の如く拉致される敵兵、柴田亮平。流石はモブキャラ。散り際までありきたりである。

「や、やったの……？」

「す、すごいや雪冬！ 召喚獣使うの初めてなのに、もう戦果をあげちゃうなんて！」

「あはは、今のはアキくんの手柄だよ……おっと」

「ゆ、雪冬！？ 大丈夫！」

へた、と突然脚から崩れ落ちた雪冬に、明久が慌てて駆け寄る。気分が悪そうな表情はしていないが……どうやら緊張の糸が切れて腰が抜けてしまったようだ。

「あ、あはは……力が抜けちゃった。オレ、こういうのって初めてだからさ……ごめんね？」

「いや、雪冬はよくやったよ。……ははっ」

「……ど、どうして笑うんだよお！」

「だ、だって……雪冬、なんか子供みたいなんだもん。身体も小さいし。とても高校生とは思えないや」

「もう……オレはれっきとした高校生だって。身体の大きさも土屋く……こーちゃんと変わらないし」

これまた子供のように頬を膨らませる雪冬。明久はそれを見てさらに笑い続ける。周囲を見ると、敵戦力はあらかた殲滅された後のような。仲間達が瑞希を中心に勝利の余韻に浸っている。

「それじゃ、僕たちも混ざりに行くっか」
「ん、そうだね」

明久の手を取り立ち上がる。二人はそのまま、集団の方へと足を進めた。

「なに？ Fクラスに情報外の戦力が？」

「は、はい。どうやら転校生のようで、そのままFクラスに……しかも、獲得点数は300点オーバー。まだ日本史の点数しか明らかになっていませんが、おそらく余程の手練れかと思われます」

「そうか……よし、そのまま偵察を続けてくれ」
「はい」

高価な教材や機材が並ぶ、Bクラスの教室。その教壇に座っていた少年は、斥候からの情報を聞き、すぐさまノートを取り出した。紫じみたサラサラの髪を、なにを考えているのかよりもよってキノコヘアーにしている。一般的な考えを言わせてもらうと、百パーセントモテそうにない髪型だ。どう見ても悪役臭い。それとも、特殊なセンスを持っているのだろうか。

「ふん……Fクラスのクズ共のくせに、いきなり大した手札を切ってきたじゃないか」

作戦を記したノートに次々と赤ペンを走らせ、内容を書き換えていく。悪役のくせして、ずいぶんと頭の切れる男らしい。予想外の事態も慌てずにすぐさま新しい計画を立てていく。

「観察処分者は最初から眼中にない。ムツツリーニは保健体育だけ警戒しておけばOK。島田は数学。坂本は……神童だが、今や落ちぶれたただのクズだ。心配はいらんだろう。……ということは、特に警戒すべきはこの二人か……」

【姫路瑞希】と【時雨雪冬】。

花丸で囲まれたその二つの名前に、少年は次々と対策を書き込んでいく。三分もたたないうちに、欄の真下は文字で埋め尽くされていた。

それを満足そうな表情で一瞥して、ノートを閉じる。彼はなぜか窓の方へと歩み寄ると、カーテンをわずかに開けながら、悪役特有の気持ちの悪い笑みを浮かべて、呟いた。

「Fクラスのクズ共め……雑魚には雑魚らしい立ち位置って奴を、上の立場の奴が直に教え込んでやるよ」

彼の名前は根本恭二。

Bクラスの代表であり、卑怯卑劣で悪名高い、最凶最悪のクズ野郎だ。

第三問（後書き）

雪「ゆつきーちゃんねるう〜？」

雄「おー」

雪「みなさんこんにちは！ 時雨雪冬です」

雄「アシスタントの坂本雄二だ」

雪「今回はついにオレの召喚獣がお披露目されたね。西洋の甲冑なんて……カツコイイー？」

雄「武器は盾のみだけだな」

雪「いちいち上げ足取らないでよゆー君！ ……コホン。さて、今回はオレの召喚獣についての情報を紹介するよー。ゆー君お願い！」

雄「はいはい。雪冬の召喚獣は、一般的な西洋鎧だ。類似体に姫路や木下姉の召喚獣がいるな。基本的な形はあれと変わらない。ただ、スカートの部分がズボンだったり、フリルが付いている部分はなくなっているなど、細かい点では男用にはなっているがな。

そして武器は【大盾】。文字通りドでかいシールドだ。想像できない人は、そうだなあ……巨大な周囲が少し滑らかな長方形の鉄板を思い浮かべてくれればそれでいい。

基本的な戦法は【キングダム〇ーツ】の【グ〇フィー】と変わらない。防御して防御して……隙があれば殴る！ といった感じだ。……こんな感じか？」

雪「はいゆー君説明ありがとう！ さて、次回からはこのコーナーにもゲストがやってくる予定です。ベース的には本作品のキャラから出す予定ですが、リクエスト次第では他作品のキャラをお借りすることもあるかもしれません。興味がある方は是非ご一報くださいー！」

雄「【オレとゆー君と召喚獣】関連の質問や感想も、どしどし受

け付けているぞ」

雪「はい、それではまた次回、後書きにてお会いしましょう」

雪・雄「バイニー？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6549y/>

オレとゆー君と召喚獣

2011年11月21日21時39分発行